

2) 朱雀門

2-7) 概要

朱雀門は平城宮跡の正門であり、平城京の入り口である羅城門からまっすぐ北に向かつてのびる幅 75mの朱雀大路の 4 m先にある。

朱雀門の前では外国使節の送迎を行ったり、時には大勢の人たちが集まって歌垣なども行われました。正月には天皇がこの門まで出向き、新年のお祝いをすることもありました。朱雀門の左右には高さ 6 mの築地がめぐり、130ha の広さの宮城をとりかこんでいました。

朱雀門には衛士によって守られ、常時開いていたわけではありませんが、宮の正門としての権威とともにその雄姿を内外に誇示していたと思われます。

資料：パンフレット「平城宮 朱雀門（奈良国立文化財研究所 1999）」



図 16 朱雀門の復元模型

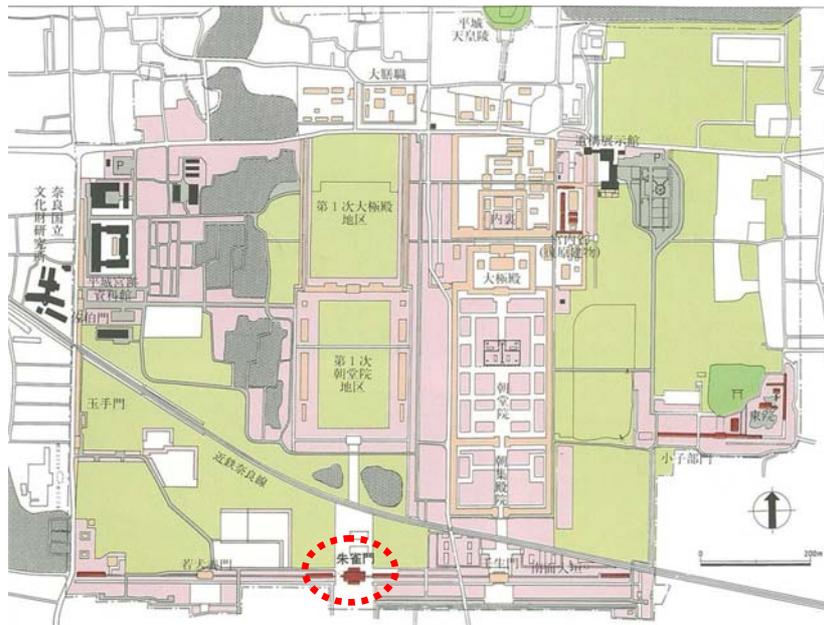


図 I - 17 朱雀門の位置

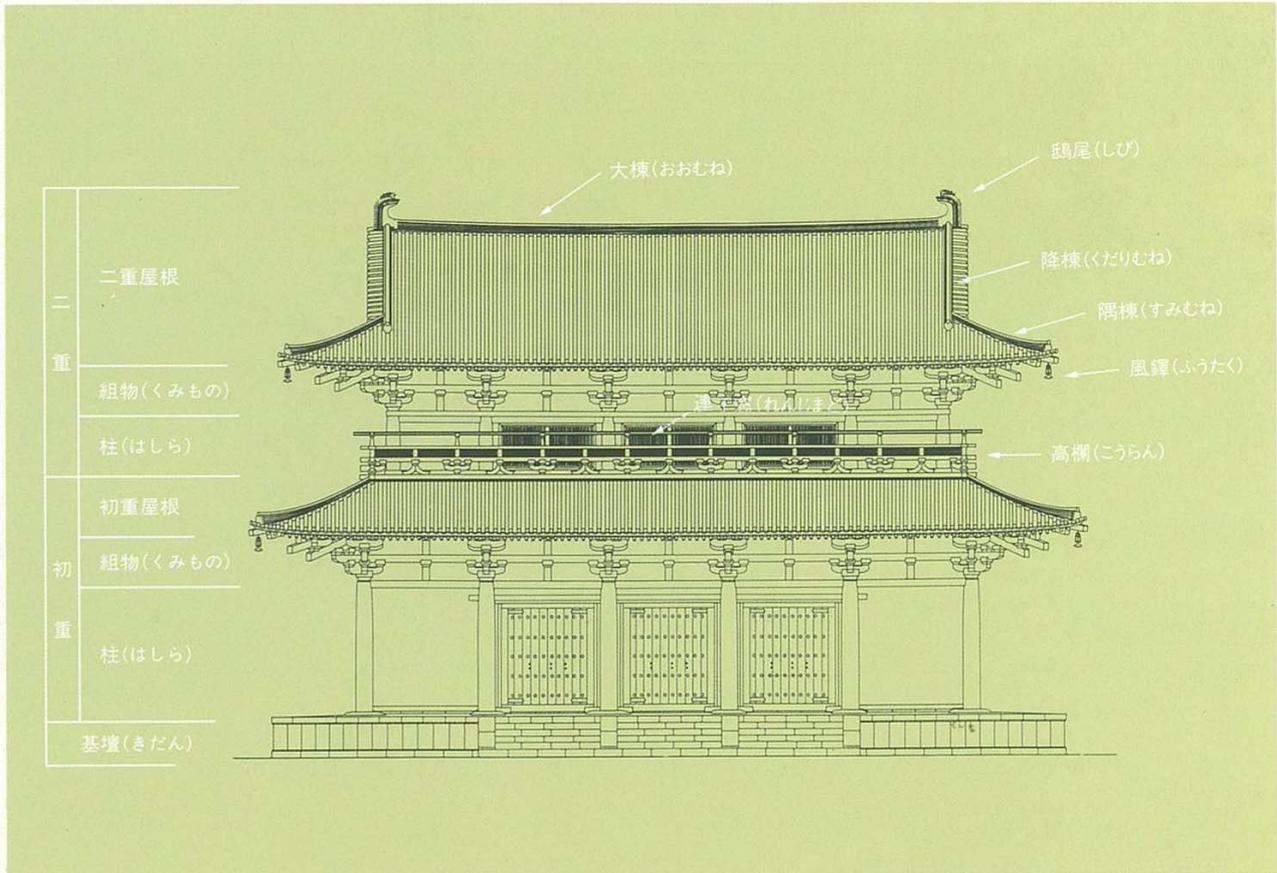
2-4) 復原の経過

朱雀門の復原研究は1964年（S39年度）の発掘調査により門の位置と規模が確認され、翌年に十分の一模型を製作したところからはじまっている。その後、1989年（H元年）から遺構の再発掘、基壇整備等がはじめられ、1992年（H4年）基壇復原工事完了、1998年（H10年）復原工事が完了した。

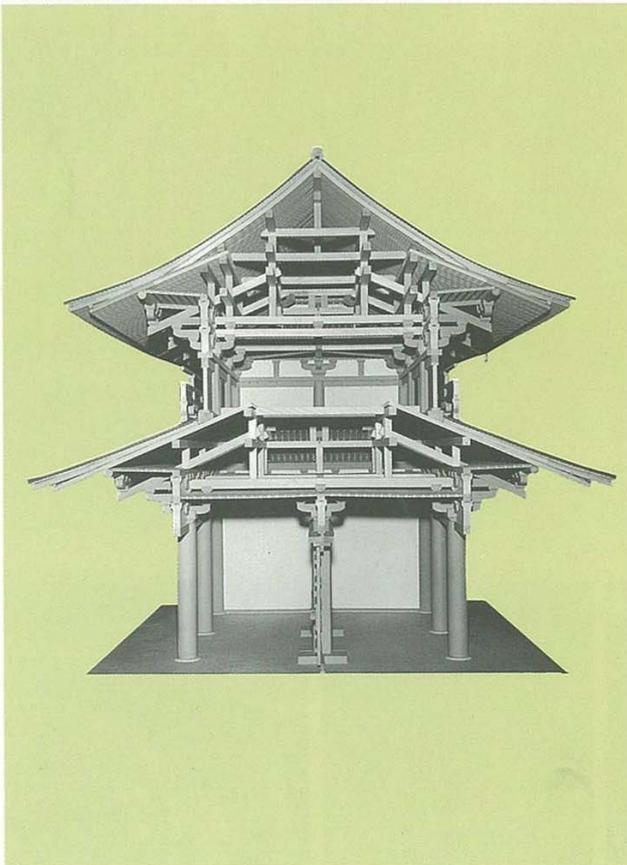
表 I - 4 復原研究の経過

年次	記 事	年次	記 事
昭和38年	奈良国立文化財研究所に平城宮跡発掘調査部を設置、平城宮跡の本格的な発掘調査を開始。	昭和57年	朱雀門西方南面大垣を発掘調査（第143次）。東方と同様の知見を得る。
昭和39年	朱雀門跡の発掘調査（第16・17次）が行われ門の位置とその規模を確認。	同 上	朱雀門西方の南面大垣を復原（長さ48m）。
昭和40年	朱雀門の復原模型を10分の1の縮尺で作製。	昭和59年	二条大路南辺から現大宮通りまで約200mの間が「朱雀大路跡」として史跡に指定される（面積20ha）。以後その内の14haを奈良市が公有化。
同 上	特別史跡平城宮跡45haが追加指定され、指定地は103haとなる。	昭和61年	研究所の特別研究として「平城宮朱雀門の意匠と構造に関する研究」を開始。以降3年間継続。
昭和45年	この年より宮内整備事業は研究所が実施することになる。	同 上	上記研究の開始にともない「平城宮朱雀門調査研究会」を設置。浅野清氏ほか8名の委員を委嘱し、第一回研究会を開催。以後6回開催。
同 上	東院張出し部21.8haが追加指定される。	平成元年	この年から朱雀門基壇復原のための予算がつき、初年度として遺構の再発掘、基壇整備等を行う。
昭和53年	平城宮跡の長期的展望をふまえた「特別史跡平城宮跡保存整備基本構想」が文化庁により策定され、以後の平城宮跡整備の基本指針となる。これには建物復原地域として朱雀門など4ヶ所があげられている。	同 上	朱雀門前面東・西隅を発掘調査（第201次）二条大路北側溝は朱雀門前で朱雀大路を横切らないことを確認。
昭和54年	「平城宮跡整備にともなう建物（朱雀門）復原に際しての材料・工法の検討」の調査・研究を文化庁記念物課からの支出委任をうけて開始。財団法人建築研究協会の協力を得て実施。この研究は昭和60年までの7年間にわたり継続。	同 上	朱雀大路史跡指定地のうち公有化部分を奈良市が仮整備。
同 上	二条大路を含めて平城宮の南辺部が追加指定され、指定地は131haとなる。	平成2年	朱雀門跡を再発掘（第211次）。礎石は自然石であったこと、南面大垣は9尺のまま朱雀門に接続することなど新しい知見を得る。
同 上	農業用水路改修工事にともない朱雀門跡および門に接続する南面築地の一部を発掘（第112次）、門南側柱列を確認。	平成4年	朱雀門基壇復原工事完了。
昭和56年	朱雀門東方の南面大垣を発掘調査（第130次）、基壇の基底幅が9尺で連続していることの確認。	平成5年	朱雀門復原のための予算がつき、朱雀門本体復原工事開始。この年は主に仮設工事、木材の購入を行う。翌平成6年12月に立柱、平成9年2月に上棟。
同 上	朱雀門東方南面大垣を復原（長さ51m）。	平成10年	朱雀門復原工事完了。

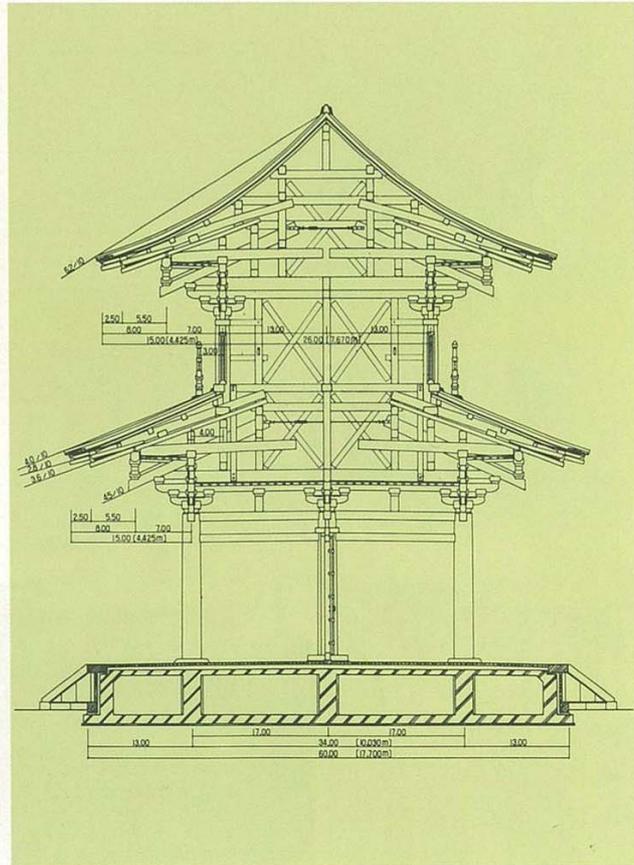
資料：パンフレット「平城宮 朱雀門（奈良国立文化財研究所1999）」



復原実施正面図



復原原案断面 (模型)



復原実施断面図

図 I-19 パンフレット「平城宮 朱雀門 (1999)」-2

3) 第一次大極殿正殿

3-7) 概要

大極殿院は天皇の即位式や元旦朝賀の儀式、舞楽など、国家的な大礼を行うときに天皇が出御する宮城の中心的な建物とされている。

整備中の大極殿の加え、築地回廊についても復原を視野に入れて検討を進めている。

施設の活用イメージとしては、サミットの開催や、能楽などの芸術・伝統イベント、セレモニーの場とすることが考えられる。

大極殿は、今から約 1300 年前の奈良時代、西暦 710 年（元明天皇）に、藤原京から遷都された平城京の北側中央に位置した「平城宮」の中心にあり、もっとも重要な建物で、遷都後の 715 年に竣工したと考えられています。平城京の造都は古代中国の都市計画を参考にしています。したがって、中国古代天文学と深く結びついている哲理（考え方）を基本にしており、大極殿の名は「太極星」からきています。太極星とは宇宙の中心にある星のことで、「北極星」のことです。大極殿は、天皇の即位式や元日の朝賀のような、国家的儀式に使われました。大極殿は 740 年の恭仁京への遷都に伴い移築されましたが、745 年に再び平城京に都が戻されてからは、元の位置の東側に区画が置かれました。このように 2 箇所ある大極殿の遺構を区別するため、最初の大極殿を便宜的に「第一次大極殿」と呼んでいます。

大極殿を築地回廊で囲んだ、南北 320m、東西 180m の範囲を大極殿院地区と呼んでいます。

資料：パンフレット「特別史跡 平城宮跡 第一次大極殿正殿復原整備特別公開（第 6 回）Q&A」



図 I - 20 中央の大極殿院 1/100 復原模型

資料：「平城宮跡資料館図録」奈良文化財研究所

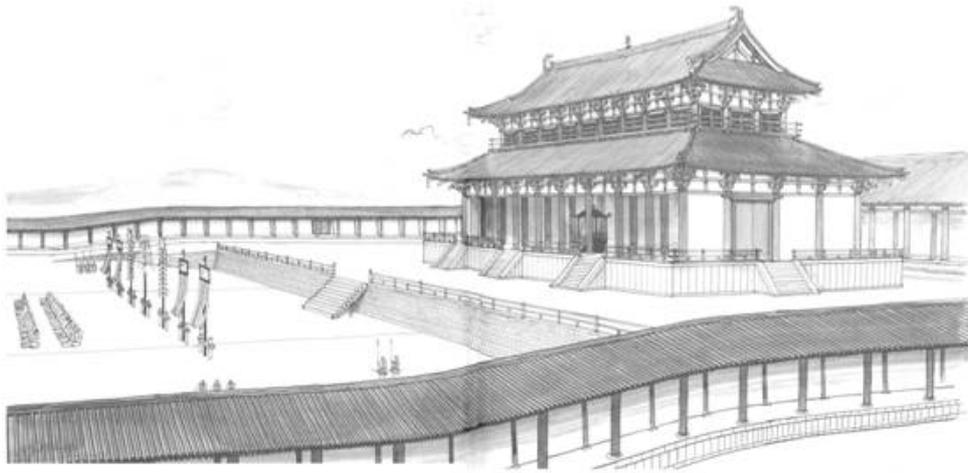


図 I - 21 かつての大極殿の様子

資料：「平城京—古代の都市計画と建築—」著：宮本長次郎 絵：穂積和夫（草思社）

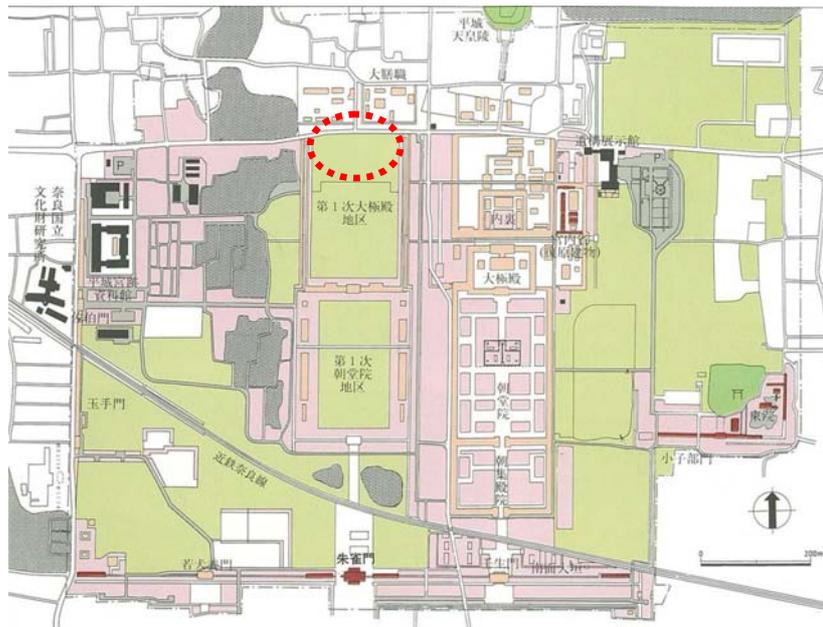


図 I - 22 第一次大極殿の位置

3-1) 復原の経緯

大極殿は平成13年度より、遷都1300年となる2010年の完成を目指し、宮跡の中核施設である第一次大極殿正殿の復原工事に着手している。

平城宮跡におけるそれまでの研究成果を基に、平成10年度から平成12年度までの3年間で、当時の奈良国立文化財研究所(現独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所)において、実施設計を行った。

第一次大極殿正殿復原整備事業は、調査研究の成果を基に奈良時代様式(意匠・構造・材料・工法等)の史実に基づく厳正な復原を目指している。

「奈良時代様式」での厳正な復原の実施のためには、建築基準法・消防法等の現行の建設関係法令等に適合させるとともに、特別史跡平城宮跡の埋蔵文化財の保護・保存のための処置を実施している。

資料：パンフレット「特別史跡 平城宮跡 第一次大極殿正殿復原整備特別公開(第6回)」

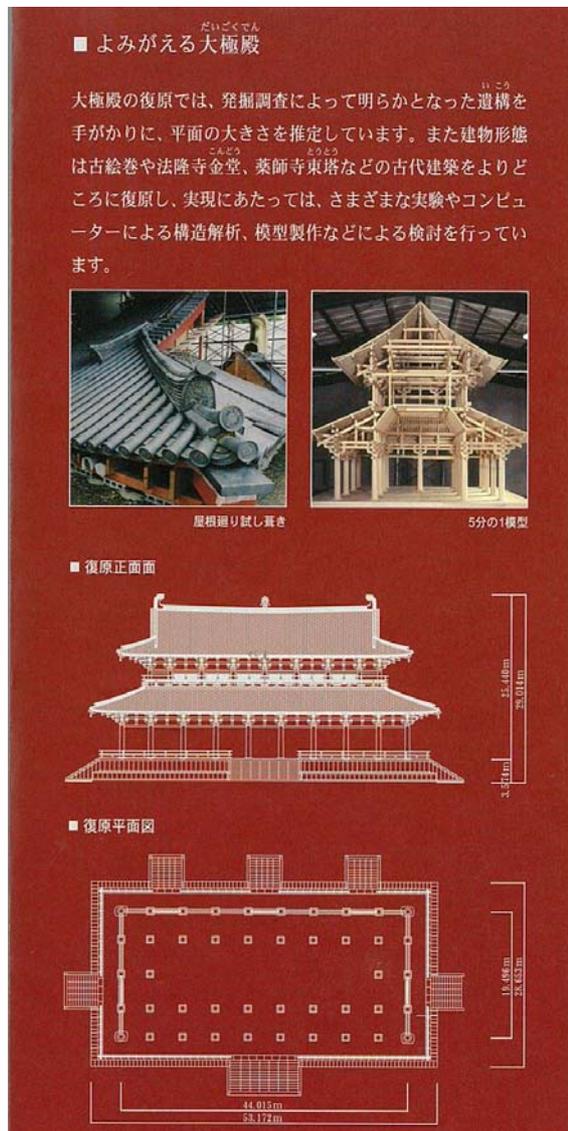


図 I-23 パンフレット「第一次大極殿正殿復原工事 一般公開施設」